第二次世界大戦中の強制収容所における日系アメリカ人の日本語による文学活動とその意義

小　林　純　子

はじめに

1941年12月7日の日本軍によるハワイ真珠湾攻撃に端を発した日米戦争の勃発はアメリカ合衆国に住む日系アメリカ人の日常の言語活動、文化活動のあり方に多大な影響を及ぼした。真珠湾攻撃から間もなく、アメリカ連邦捜査局FBIが、ハワイやアメリカ西海岸の日系コミュニティの指導者的立場にあった人々の家宅捜索、逮捕、連行をはじめると、自分たちの安全を確保するために、日系コミュニティの中で、それまでに何の疑問を抱くこともなく所持してきた日本語書籍や「日本的」なものを自ら排除していく動きがはじまった。1953年初版の自伝的小説*Nisei Daughter*の中で、日系二世のMonica Soneは予期せぬ、かつ恣意的な逮捕が相次ぐシアトルの日系社会の不安に包まれた様子を次のように描写する[1]。

家族に生鮮食品の配達をするMr. Yoritaに主人公Monicaの母が気をつけるよう声をかけると、彼は“They wouldn’t be interested in anyone as insignificant as myself!”[2]とその懸念を一笑に付した。しかし翌週の配達には新しい少年が現れ、Mr. Yoritaが連行されたことを告げる。“The way I see it, it’s subversive to sell soy sauce now.”[3]と配達少年が付け加えた皮肉には、日系文化に根差した日常の何気ない行為までもが日系アメリカ人の不穏性や不忠性の表象へと転化されていく様子が示されている。

Mr. Yoritaの逮捕から間もなく、Monicaの母は、夫がFBIに連行された

Mrs. Matsuiから“You must destroy everything and anything Japanese which may incriminate your husband.”[4]とアドバイスを受ける。逮捕の過程で、内容に関係なく、日本製のもの、日本で出版されたものすべてをFBIが「証拠」として押収していったからである。他の人からも同じような話を聞いた母は、家族総出で「日本的」なものを取り除く決意をする。本棚、押入、引き出しからくまなく引き抜かれた「日本的」なものには日本語学校の教科書、日本人形、父母が情熱を傾けて読んできた哲学や文学の書籍やスクラップブックが含まれていた。付着する思い出や愛着の度合いに関係なく、そうしたものは地下の暖房炉の炎のなかに次々と投げ入れられた。作業は夜中近くまで及び、疲れ切って床に就く主人公は次のように語る。“Wearily we closed our eyes, filled with an indescribable sense of guilt for having destroyed the things we loved. This night of ravage was to haunt us for years.”[5] Sone一家を長くにわたり苛ませたこの夜の場面に類似した出来事は、日米開戦直後の日系コミュニティで頻発した。Sone一家が燃やしたものは「国家の安全」とは遠くかけ離れたものがほとんどであったが、それらを処分することが、「不忠誠」や「危険分子」のレッテルを避け、自分たちの安全を確保するために必須と感ぜざるを得ないほどにアメリカ社会の日系アメリカ人に対する敵対心、猜疑心は強くなっていた。1942年2月にルーズベルト大統領が署名した大統領令9066はこうした動向に拍車をかける。この大統領令は日系アメリカ人人口が集中するアメリカ西海岸を「軍事区域」と指定し、その区域からの日系アメリカ人の強制退去・収容を可能にした。収容所に持ち込むことが許されたものは「自分自身で持ち運べるもの」のみに制限されたことに加え、「日本的」に見えるものが招きかねない危険を恐れた日系アメリカ人はSone一家のように、「日本的」なものの排除を身を切るように余儀なくされる。

こうした日米戦争勃発後の「日本的」なものに対するヒステリックな反応、そしてそれに対し「日本的」なものを自ら排除しなければならなかった日系アメリカ社会の集団的トラウマにもかかわらず、アメリカ内陸部に点

在した各強制収容所内で、日系アメリカ人たちは日本の文化的背景も色濃く反映するバイカルチャルな文化的、芸術的な表現をうみだしていった。こうした文化的活動は、2010年3月からスミソニアンアメリカ美術館において開催された、収容生活の中で創り出されたおびただしい数の創作品を紹介した展覧会、The Art of Gaman: Arts and Crafts from the Japanese American Internment Camps, 1942-1946[6]で注目を集めた。

本稿ではこのような強制収容所内での文化活動の一環としての日本語文学活動と文学が可能にした表現に着目し、考察する。まず収容所内で日本語文学活動がどのように展開したかを概観する。次に収容所を管轄した戦時転住局War Relocation Authority (WRA)がとった文化政策を考察することで、日本語文学活動を適切な歴史的コンテクストに位置づけたい。その上でこの文学活動の歴史的意義として次の二点を浮き彫りにしていきたい。収容所内での日本語文学活動は、他の「日本的」な日用品、工芸品、芸術品をうみだした活動と同様、戦時転住局が「アメリカ化」「英語のみの環境づくり」の圧力をかけたことにもかかわらず、日本とアメリカ双方の影響を色濃く反映したバイカルチャルかつ主体的な文化環境の創設に大きく貢献したこと。さらに、日本語文学が、日本かアメリカかというように極端に二項対立化した戦時収容所内においても、政治的には発言することの難しい問題―例えば日系アメリカ人と国家への忠誠という問題―に関して、微妙かつ複雑な立場や見解を探求し表現することを可能にしたことである。

1. 強制収容所内での日本語文学活動

拙論“ ‘Bitter Sweet Home’: Celebration of Biculturalism in Japanese Language Japanese American Literature, 1936-1952” (PhD diss., University of Iowa, 2005)で概観したように、1920年から30年代にかけてアメリカ西海岸各地の日系コミュニティで活発に展開した日本語文学活動の伝統に立脚する形で、各地の収容所内で日本語文学活動が様々な形態で展開された。1943年2月

から1945年9月にポストン収容所で計25巻発刊された『ポストン文芸』、1943年12月から1944年9月にハートマウンテン収容所で計9巻発刊された『ハートマウンテン文芸』、1944年3月から1945年7月にトューリ・レーク収容所で計9巻発刊された『鉄柵』などの総合文学雑誌の例からも、主要所内における日本語文学活動の活発性が伺える[7]。

収容所内での日本語文学活動は、「日本的リクリエーション」（Japanese type recreation）として戦時転住局（WRA）から認可は受けても、経済的支援などをうけることはなかった。そのため文学雑誌は戦前の同人誌の出版形式をふまえ、会費で第一巻の謄写版冊子の出版費用をまかない、それ以降は前巻の雑誌の売り上げを次巻の出版費用にあてた。

日本語文学雑誌は、日本語の刊行物がなかなか手に入りにくい収容所生活で、数少ない日本語の読み物として重要な役割を担った。雑誌の流通は雑誌が発行された収容所内にとどまらず、人の移動や郵便などにより、収容所間もしくは収容所内外でも共有された。また雑誌を発行していない収容所の人が、他の収容所の雑誌に文学作品を郵便などで投稿し、発表するということも少なくなかった。

2. 収容所内で発行された日本語文学の歴史的意義

このようにして収容所内で発行されたおびただしい数の日本語文学の歴史的意義は何であろうか。一つにはリドレス運動を経た現在もなお、十分語りつくされていない「声」を内包する歴史的資料としての一面である。第二次世界大戦中の強制退去・収容の経験が大きくアメリカ社会から注目されるようになったのは、1970年代から80年代に三世や四世を中心に展開したリドレス運動の功績が大きい。この運動の中で作られた世代間の対比は、合衆国が国家としてとった人種差別的行為に関しての正式な謝罪と賠償を声高に要求する三、四世に対して「恥」の意識や「自らや家族を守るために」等様々な理由で沈黙を守ってきた「静かな」「多くを語らない」

一、二世というイメージである。

しかし、「静か」で「多くを語らない」というイメージの形成は、発信者側―この場合一、二世―だけの問題ではなく、受信側、聞く側の問題でもあるのではないか。言語の問題や、ある一定の時代、場所で受け入れられるテーマ、そうでないテーマといった問題で、「発信」はされていても「聞かれていない」「無視されている」声もある。一世や帰米二世[8]が中心となって展開した収容所内での日本語文学表現を読み解くことは、「多くを語らない」といわれてきた人々の当時の声に耳を傾ける一つの重要な方法となる。

さらに、収容所内で発行された日本語文学を見直すことには、強制収容所という環境におかれた日系アメリカ人の「抵抗」と文化的、芸術的表現の関連性を浮かび上がらせるという意義がある。1970年代から80年代にかけて、それまで一般的だった日系アメリカ人の収容所内での抵抗に関する学説（orthodox scholarship）が、Arthur HansenやGary Okihiro等の歴史家によって見直された[9]。それまでの学説では、日系アメリカ人による収容所内での抵抗は時間的にも場所的にも点在するものにすぎず、大半は収容所生活への最初の移行期間で積もった不満や少数の親日派の扇動といった理由で、例外的かつ突発的に起こったものとみなされていた。

それに対し、HansenやOkihiroはアメリカにおける戦時中の日系人の扱いを、戦時ヒステリーなどによる常時からの逸脱ではなく、戦前から続くアジア系に対する人種差別の論理的帰結であると位置づける。その上で、日系人による「抵抗」をもう少し広く定義し直す。すなわち、「抵抗」とは戦時転住局によって押し付けられる「アメリカ化」へのプレッシャーに対して日系コミュニティが日系の文化を守っていくことでもあったと主張するのである。

それまでの学説では収容所管理者側と日系人との間の明らかな政治的衝突のみが「抵抗」とみなされたが、HansenやOkihiroは管理者側が「平穏」な状態とみなしている収容所内にも持続的に続く「抵抗」を見出す。

Okihiroは日系アメリカ人の抵抗は、抵抗の内容が「抗議」から「文化的主体性の主張」に移行することで、あたかも「抵抗」そのものがなくなってしまったかのようにみえるという。アリゾナ州ヒラ・リバー収容所での新年会や、一世の親の二世の子供への影響といった事例をあげながら、HansenやOkihiroは特に一世の男性がより日本的な制度、価値、関係といった伝統的な基盤にのっとって、コミュニティにおける自分たちの権力を取り戻していく「抵抗」を明示する。

HansenやOkihiroが再定義した「抵抗」の概念にそって考えると、日本語文学は書き手－そして広くは読み手にとって－「アメリカ化」の圧力に抗して、日系コミュニティの持つバイカルチャルな伝統に立脚した、日系アメリカ人固有のアイデンティティーを主張し、育む一つの手段であったと定義することもできる。HansenやOkihiroが取り上げた事例では収容所管理当局と協調する若い二世のリーダーに対して、一世の男性が「抵抗」することに焦点が当てられていたが、日本語文学では、管理当局への批判とともに他の一世や帰米の政治的姿勢や行動への批判なども表現された。つまり日本語文学は管理当局に対する日系アメリカ人の批判といった一枚岩としての日系コミュニティの声を反映しただけでなく、日系人の間でも意見の分かれる多様な見解を、ある程度自由に批評し合える多元的な文化スペースを提供していたといえる。

収容所の中では管理局側からの統制はもちろんのこと、忠誠登録などをめぐって日系人間での軋轢も多くあったため、こと「政治的」な発言は容易にはできなかった。「政治的」とされる表現が自由にできない状況下、どこに「抵抗」の表現をみいだせるのであろうか。東南アジア地域の人類学者･政治学者のJames Scottは、抑圧されている人々の「批判」や「抵抗」は権力者の目の届かない「舞台裏」（off stage）で、「隠された記録」（Hidden Transcripts）として表現されると主張した[10]。日本語で書かれ文化的表現でもある文学は感情や感性の表現の場であって、政治やイデオロギーの表現の場ではないという見解が管理当局や所内の日系人の間で持たれていたこ

とから、日本語文学はScottのいうところの「隠された記録」になり得たのではないだろうか。

3. 戦時転住局（WRA）の日本語文学活動に対する方針と対応

日本語文学で実際に何がどのように表現されていたのか、そしてその中に「抵抗」を見出すことができるのかどうかを精査する前に、その文学表現がどのような環境で生み出されたのか、当時の状況にあてはめて考える必要がある。この章では強制収容所管理者である戦時転住局が日本語文学活動などの「日本的」文化活動に対してどのような政策を採っていたのかを検証していく[11]。

ワシントンD.C.におかれた中央の戦時転住局は強制退去、収容を日系アメリカ人がアメリカ主流（白人）社会へと同化していくことを促進する絶好の機会ととらえた。アリゾナ州ポストンの戦時転住局、成人教育課のD. A. Conlinは収容所を、「日系アメリカ人がアメリカを理解する教育プログラムを施す稀な機会」（“a rare opportunity for an educational program to help these people understand America”[12]）と表現する。この言葉の前後に見え隠れする前提は、戦前から続くアジア系排斥運動や、アジア系移民を「帰化不能」と位置付ける人種差別的移民法は棚上げにし、ただただ「同化」を拒む日系、特に一世や帰米を問題視し、英語だけの環境や日系コミュニティから「日本的」なものを排除することにより、同化を促進する必要があるという見方である。

Conlinの属した成人教育課（the Community Activity Section, Adult Education Program, the WRA）は、各収容所内で「アメリカ化」（Americanization）を促す教育や文化プログラムの展開を担った部署である。成人教育課がその活動指針の拠り所とした行政マニュアルには、日系アメリカ人の「アメリカ化」政策が、将来の「忠誠な」日系人の収容所からの転住とアメリカ社会へのより速やかな再編のために不可欠であるとされていた。そのため

に、成人教育課は日系人を収容所内で「典型的にアメリカ的な」（typically American in concept）活動に参加させる使命を負っていた。成人教育課は特に一世と帰米の「アメリカ化」を促進するために、収容所内をできるだけ英語だけの環境（English-only Environment）にし、「アメリカ的」な活動の普及に努めたのである[13]。

しかし、戦時転住局の行政マニュアル上の「アメリカ化」、「英語だけの環境」の強調とはうらはらに、各地の収容所内では実際に「日本化」（Japnaization）の傾向が進んでいるという事態が次々と報告される。戦時転住局のために働いていた人類学者の一人に戦前から日本やハワイのことについて研究をしてきたJohn F. Embreeがいた。彼はポストン収容所で戦時転住局に収容者の文化的、社会的動向をきめ細かに報告するCommunity Analystとしての職に就いていたが、専門知識を持つ彼の報告書はしばし戦時転住局職員に対する「日本の文化」についてのマニュアルのようにも使われていた[14]。1943年9月9日のEmbreeの報告書、“Notes on Poston”の中で、彼は一世や帰米の「アメリカ化」どころか、日系アメリカ人のみ収容されている収容所の環境で、今まで「アメリカ化」が進んでいるとみなされていた二世にまで「日本化」が進んでいると危惧の念を表明する[15]。Embreeと同じように、1943年から1946年の間トューリ・レーク収容所でCommunity Analystとして働いていた人類学者のMarvin K. Oplerも、収容所内で人気を集める相撲や川柳に注目し、こうした「日本的」文化の普及を収容所という特殊な環境における「文化復興」（cultural revivalism）と位置付けたほどである[16]。

このように二世の間でさえも「日本化」が見受けられた収容所内の環境下、主に一世や帰米を対象にした成人教育の教室では、生花、造花、碁、芝居、詩吟、裁縫など「日本的」な趣向の強い教室への関心が高かったことは驚くべきことではないだろう。例えば、前述のポストン収容所の成人教育課のD.A. Conlinが集めた統計では「日本的」な趣向の教室に入っている人数は3,600人を超え、成人教育課が開催している教室に入っている全体

人数の90％を占めた[17]。

しかし、現地の戦時転住局の役人は、中央の戦時転住局が打ち出した「アメリカ化」、英語だけの環境重視の方針と現実との間のギャップを目の当たりにしても、このような「日本的」な趣向の教室が収容所の円滑な運営に役立つという別の意味での役割をみいだした。こうした教室が、収容所生活の欲求不満を解消し、精神的な励みになり、収容所内の平静を保ち、ギャンブルなどの好ましくない活動を防ぐといった理由である。

ポストン収容所、戦時転住局の成人教育課長は1943年4月21日のインタビューの中で、収容所内で特に不満が著しい一世たちの士気を高めることは重要なことだとの現状認識を示す[18]。同収容所内での「日本的」な教室に関しても、D.A. Conlinは、それらの教室が収容所内の士気を高め、健全なコミュニティの建設に貢献していると報告する[19]。1945年1月に発行されたポストン収容所の日本語文学雑誌、『ポストン文芸』の新年号では収容所長Duncan Millsと副所長C.W. Powellの連名で、「日本的」文化･芸術活動が、「平静で、思慮深く、感受性豊かな収容所生活の質の向上に貢献し、またそれを維持する」活動だとの賛辞を寄せている[20]。このようにして現地の戦時転住局の役人により「日本的」文化活動の成果が認められるようになると、「日本的な」、そして日本語を使った活動の許可は、あくまで日系人の間や日系人と収容所管理者側との対立を招かない限り、獲得しやすくなっていった。

日本語文学活動を含む「日本的な」文化・芸術活動に対して、戦時転住局は、表向きは「アメリカ化」、英語重視の方針を掲げながら、実際には円滑な収容所運営に役立つ活動は認めるといった、ある意味「ゆるやかな」態度で臨んだ。しかし収容所内で発行された文学雑誌を読み解く際に検閲の問題は避けては通れない。検閲にも様々な程度、段階があるが、戦時転住局による検閲、発行者みずからが課した自主規制、及び表現者が様々な形で行った自己規制等を考える必要がある。

特定の日本語文学雑誌の発刊の許可を得るために、第一号の発刊には特

に厳しい検閲があり、編集者は第一号の内容すべてを英訳して戦時転住局に提出した。例えばトューリ・レーク収容所で発行された『怒涛』の場合、第一号は内容を注意深く選び、翻訳したうえで、戦時転住局に提出したという。一度発行の許可が降り、戦時転住局も発行団体に対してあまり懸念を抱かなくなると、次号からは英訳提出をしなくてもよくなることもあり、編集者や書き手が管理当局の目をあまり気にしなくてもいいようにはなったという[21]。

また戦時転住局だけでなく、収容所という特殊な環境下、突然FBIの捜査官により編集者が尋問されるといったこともあった。トューリ・レーク収容所の『鉄柵』の中心的なメンバーであった野沢穣二は、第五号を編集中に他の二人の編集者、山城正雄と河合一夫とともに連邦捜査官に尋問された時のことを次のように回顧する。

> …彼らの目的は私が書いた「短波放送局」にあったやうだ。その頃、館府内では手製のラヂオで日本の放送を聴取してゐる人が多かった…FBIは短波放送局の見出しを見て、私をしぼったら何らかの手掛りが掴めるのではないかと考へたらしい。質問は前後三回に亘って繰り返され、執拗を極めたが、ショートウェーブの所有者、人見殺害事件の手掛かりを掴もうとしてゐることが判った。私は何を聞かれても「知らない」と答へるより他なかった。質問中私は三本もFBIの煙草を喫ひ、極度の緊張からクタクタになって放免されたが…[22]

このように管理者やFBIなどの監視を常に意識しなければならない収容所内での文学雑誌の発行に、編集者たちは少なからず自主規制をかけた。例えば『鉄柵』の三号では編集者が今後の投稿者を対象に、編集側の採用基準を明らかにしている。

> 序だから書くが、我々が「鉄柵」を永続せんと希望する限り、掲載す

べからざる原稿―例えば、政治的なもの、日米開戦を批判的に書いたもの、又当局の政策に対して不満を訴えたもの―は仮令如何なる名文佳作とも全部ボツにすることにしている。我々はキャンプと云う鉄柵の中に在り、厳重に監視されている。自己のかかる環境を認識する事は普通の常識さえあれば何等の知識がなくとも充分であり、「興えられた環境」を善処するだけの良識が苟も筆を取る者には有って欲しいと思う。…投稿家の中には随分過激なる作品を送付せし人もいるので、我々の立場を明らかにして参考の為に書く事にした[23]。

また『ポストン文芸』においても、1945年の新年号発表の懸賞作品の扱いをめぐって、編集者と自己規制の問題が浮き彫りになる。懸賞作品の二等に入ったサトダ･イチロウの短編小説、「志願兵」は新年号には掲載されなかった。そのことについて編集部が次のように説明する。「……時節柄その表現乃至字句に多少誤解を招く憂ひありと認め、編集会議の結果甚だ遺憾乍らその発表を暫時見合すことに一決した。この点作者並びに愛読者諸氏の御諒怒［ママ］を乞ふ[24]。」

恒常かつ突発的な監視者の介入を常に意識せざるを得なかった収容所内で、日本語文学雑誌の編者、著者は物議をかもしだしかねない、問題視されかねないトピックは自主規制で触れないようにしていた。その一方で、日本語で表現されることを収容所管理者当局が完全に掌握、支配することはできず、選択的に実施される検閲を注意深く潜り抜けながら、収容所内で日本語による文学的表現は活発に生み出され、共有されていった。

4. 日系アメリカ人による文化的主体性の主張

このように「ゆるやかに」支配された環境の中で、日本語文学表現を通して日系アメリカ人の書き手たちは真珠湾攻撃以降、特に汚名を着せられていた「日本的」なものを含むバイカルチャルな日系アメリカ文化の伝統

を踏襲し、主張していく。その姿勢がよく表れているのが、日本語文学雑誌の中で、数多くの書き手たちが収容所内で展開した様々な文化活動についての見解を寄せたエッセイである。収容所内で幅広く活発に行われた「日本的」要素を色濃く反映する文化活動を、日本語の書き手たちは強制退去・収容、収容所の置かれた荒涼とした環境、「アメリカ化」への圧力といった困難にもかかわらず、日系としての自分たちの文化やアイデンティティーを守っていくための大切な活動・表現として受け止めていた。

例えばポストン収容所で開催された「活け花展」を鑑賞した有田育は次のような感想を語る。「初歩の方のだと思はるる作品にしても、作者の個性がその上に表現され、其の苦心の跡が、歴然と窺はれて、実に何んとも［ママ］言へない奥床しい感に打たれたのであった。沙漠にも花が咲く[25]。」天候も厳しい殺伐とした収容所の環境の中でも、美しいものを、与えられたもの、探し出せるものの中から生み出していく創造力を、同じ収容者の立場から称えている。

収容所の中の文化活動は多岐にわたり、ポストン収容所では日本的な芝居のグループもつくられ、他の収容者の余興のために数々の舞台が上演された。その上演に欠かせない、花道をも備えた芝居の舞台が収容者の手で建てられた時、松原信夫は次のような賛辞を贈る。

> 加州を追はれ、この炎熱沙漠の中で悶々の情やる方なく、土埃と酷熱と栄養不良とに苦しめられてゐた同胞を慰めやうとして結成された劇団、そしてその人々を中心として建てられた劇場だ。仮令外観は貧しくとも政府が建ててくれたものではなく、我々同胞が自発的に協力して造り上げたものであるだけに貴いものだ[26]。

収容所内で政府が支給したものではなく、強制退去・収容の苦難にもかかわらず、自らが創り出したものに対する自覚、誇りが強調されている。

自分たちが作り上げた文化に対する同じような意識はトューリ・レーク

収容所内で生まれた文化について考察した山城正雄のエッセイの中でも表現される。『鉄柵』創刊号掲載の「キャンプ雑感」と題したエッセイの中で、山城はバラックのあちこちに掲げられる墨書き、縦書き、横書きなどバイカルチャルな表札に注目する。生活の必然、退屈しのぎ、暇つぶしという理由もあいまって、このような日用品、芸術・美術品をうみだす収容所の文化が萌芽したと山城は観察するが、その一方で、強制退去・収容の過程で番号化されてしまった名前や家を「自分のもの」として取り戻すという、表札を作る過程での意識も見逃さない。表札の文化は「興へられた家を「我が家」と意識し、意識されて、最初は訪問客と郵便物の為に、標札［ママ］も姿を見せた[27]」とする山城の観察眼には松原と同じような、自分たちが奪われたものを取り戻し、意識的に「自分のもの」として創りあげ、主張していく過程への自覚、誇りが見受けられる。

各地の収容所で流行した下駄の文化に対する反応を世代別に対比させると、日本語の書き手となった一世や帰米などより年長の世代が、日系アメリカ人の文化、アイデンティティーの維持、創造にあたり、「日本的」なものを維持していくことにみせるこだわりが明確になる。本稿の冒頭で紹介した二世作家、Monica Soneは通常ならよりアメリカ的な物質文化を好む二世をも巻き込んだ収容所における下駄の流行を“the *geta* craze”と呼んだ。舗装していない収容所の道は雨のたびに泥まみれとなり、その道を共同トイレ、シャワーなどに行き来しなければならないMonicaと妹たちは収容所の外の非日系人の友人やメール・オーダーなどを頼って、雨靴（galosh）を入手しようとする。しかし最終的に彼女たちの泥道対策となったのは、はじめは見下していた下駄だった。

> When I first saw an old bachelor wearing a homemade pair [of *geta*], his brown horny feet exposed to the world, I was shocked with his daring. But soon I begged Father to ask one of his friends who knew a man who knew a carpenter to make a pair for me. My gay red *getas* were wonderful. They served

> as shower clogs, and their three-inch lifts kept me out of the mud. They also solved my nylon problem, for I couldn't wear stockings with them.[28]

Soneは下駄の文化の受容を、シャワーへ行くときの履物としての便利さ、優れた泥対策、そしてストッキングをはく必要がなくなる気楽さといった利便性に焦点をあてて説明する。Monicaのような二世による下駄文化の受容は、下駄を履いた年配の独身男性に対する彼女の最初の反応が物語るように、収容所という特殊な環境でなければ考えられないことだった。こうした若い世代の「日本的」な文化の受容を、前述の戦時転住局に勤めた白人の人類学者達—John F. EmbreeやMarvin K. Opler－は「日本化」（Japanization）として危惧する。主流の白人文化への同化を普遍的理想ととらえる収容所管理者側の目に、「日本化」という現象は、収容所という人種的、文化的に孤立した特殊な環境における、異常、もしくは強制収容の不健全な副産物として映った[29]。

このような「異常」かつ「不健全」な文化現象という見方とは全く相反する文化観が日本語文学雑誌上で展開される。戦前から英語、日本語で詩集を出版してきた一世の詩人、加川文一は「下駄」と題されたエッセイの中で、下駄の文化がどのように収容所の中での日系アメリカ人の生活に貢献したかを表現した。加川は日米開戦から強制退去・収容を経験する心情を次のように表現する。

> 実際、家もなくなり、財産も根こそぎ失って、或るものは親兄弟とも別れて仕舞ひ、親しくしてゐた友人、知人もどこへやられたのやら、－戦争がまき起した混乱にまぎれて襲ひよる暗い不安と動揺に私たちは戸惑うばかりで、自分で自分が何をしてゐるのかさへ分らない有様だった[30]。

そして、このような「茫然自失の」精神状態から立ち直ることに下駄の文

化が貢献したと加川は続ける[31]。収容所生活の中で、下駄の役割は形を変えてきた。最初人々は廃材を利用して、泥だらけの舗装していない道に対処するために下駄をつくっていた。時が経つにつれ、下駄に適した木材を入手するようになったり、時間をかけて下駄に細工を加えたり、装飾を施したりするようになり、より上質な手の込んだ下駄が登場する。「芸術品」と化した下駄は収容所の工芸・美術品展にも出品されるほどだと少し皮肉を交えて加川は述べる。山城が論じた表札の文化のように、加川も下駄の文化を収容所生活の中での文化活動の一環として位置づけ、便利で美しい下駄のような日用品、転じて工芸品・美術品の創造こそが、日系アメリカ人が強制収容所という過酷な環境の中で自分自身を見失わずに生きることのできた理由であると評価する。

この自分自身を失わないようにするための文化の創生こそ、加川が『鉄柵』創刊号に寄せた「創刊の辞」の中で収容所の中で日本語文学を書くという行為に求めた意義だった。日本語で書く、それを文学雑誌として出版することの意義として、加川は次のように述べる。

> その主なるものとして私たちは現在自由を奪われた収容所生活をしてゐるとは云へ、自分たちの文化―すなはち自分を決して失ってゐるものでないといふことを実際に於て示すに適した試練をうけてゐる点を挙げることが出来る[32]。

加川は強制退去･収容の過酷な体験にもかかわらず「自分たちの文化」そして自我は失っていないと強調する。そのことを示す文化表現の形態は日本語文学から、下駄・表札などの日用工芸品など多岐に渡るが、それらの多くは戦前からの日系アメリカ人の伝統を引き継ぎ、バイカルチャルな形態をとった。管理者側から「アメリカ化」や英語だけの環境づくりといった政策が推し進められていた環境を鑑みる時、バイカルチャルなおびただしい数の日系アメリカ人の文化表現は、「抵抗」の概念を見直したHansen

やOkihiroなどの歴史家が論じた「文化的主体性の主張」の一環であったと位置付けることができる。

5. 忠誠登録問題における日本語文学の役割

これまで見てきたように、収容所の中の日本語文学活動は、日系アメリカ人に「文化的主体性の主張」の場を提供してきたが、それに加えて日系アメリカ人の忠誠問題という戦時下、非常に繊細かつ政治的な問題を比較的安全に議論する場をも提供した。政治的には親米派、親日派が拮抗する収容所の中で、アメリカか日本かという二者択一の選択肢だけではとうてい説明しきることのできない複雑な思いや経験を反映する場を日本語文学活動が提供したのである。この章では後に「忠誠登録」と呼ばれるアンケート調査が、収容所内の日系アメリカ人にどのような影響を及ぼしたかを検討した後、収容所内で生まれた二つの相対するナショナリズムの表象を分析する。その文脈の中で、日系アメリカ人と忠誠の問題を取り上げた日本語文学作品を考察することで、文学が拾い上げることのできた微妙かつ多義で複雑な日系アメリカ人と国家との関係を浮かび上がらせる。

世代、市民権の有無、思想などに関係なくすべての日系アメリカ人は不忠誠であるという前提にたった強制退去・収容が日系アメリカ人の国家との関係性やアイデンティティーに大きな影響を及ぼしたことは言うまでもない。さらにこの問題は、1943年2月から行われた、「忠誠登録」により深刻化する。「忠誠登録」とは日系二世男子を徴兵し、人種的に隔離された戦闘部隊を造ろうと考える陸軍省と、合衆国に忠誠であると証明できた日系人から漸次収容所外に転住させていきたい戦時転住局の思惑が重なることで生まれたアンケートである。17歳以上の収容者すべてが対象になり、十分な準備や事前説明のないまま調査が行われた。アンケートの中でYes-Noの二者択一の選択を求められた質問27と28がとりわけ大きな問題をはらんでいた。質問27は米軍に戦闘任務を前提として入隊する意思を尋ね、質問

28は日本の天皇への忠誠、服従を否定すること、合衆国に対する無条件の忠誠を誓えるかどうかを尋ねた[33]。

回答如何によってどのような措置が待ち受けるのか明確な説明がなされず、収容者の間で様々な憶測、不安、動揺を招いた。例えば質問27にYesと回答すれば即時米軍への入隊を意味するのか、家族内で別の答え方をした場合、家族は引き裂かれるのか。アンケートは「出所許可申請書」（Application for Leave Clearance）と題されており、2つの質問にYesと答え「忠誠」とみなされれば、受け入れ先のない状況で排日感情の色濃い収容所外に追い出されるのか。また、質問28にYesと答える一世は、米国への帰化権を持たないため無国籍状態になってしまうのか、といった深刻な問題をはらむものである。緊迫、混乱の度合いは各収容所で異なったが、忠誠登録は断行され、質問27、28に但し書きなどをつけず、無条件でYes-Yesと答えなかった者は「不忠誠」のレッテルを貼られ不忠誠者を集めることになったトューリ・レーク隔離収容所に送られた。

忠誠登録を巡って非常に緊迫した収容所内では大きく分けて二種の偏重的なナショナリズムが台頭した。戦時転住局やアメリカ軍が鼓舞し、二世のリーダーが率いる日系市民協会（JACL）も推奨する親米派と天皇や日章旗のシンボルの下に日本への忠国をうたう極端な親日派である。ナショナリズムの多くがそうであるように、これら二種のナショナリズムの構築にジェンダーは大きな役割を果たし、両派の謳う二種類の男性性の拮抗が顕著になった。

親米派が謳う「忠誠な日系アメリカ人」像がどのように構築され、収容所内外で広められていったかがうかがえるものに、戦時転住局のカメラマンが記録したキャプション付きの写真がある。Hikaru Iwasakiは戦時転住局のカメラマンの一員として、各地の収容所で人物、行事、風景など様々な記録写真を撮った。その中に二世兵士とその家族を題材にしたものが多く含まれる。Iwasakiのとらえたイメージと写真についたキャプションでは、アメリカへの「120％」の忠誠を尽くす軍服姿の二世兵士に男性的イメー

ジが付与され、その男性性が、女性化されたイメージの妻や一世の両親が支える銃後とのコントラストにより強調される。

1945年7月11日の日付のついた写真ではハートマウンテン収容所からカリフォルニア州サンフォゼに移ったHarry J. Iwagaki夫妻が、玄関の前の階段に息子のKenneth Iwagaki軍曹と三人並んで腰掛け、微笑んでいる様子がとらえられている。Kennethは駐屯中のCamp Snellingから海外に出征する前に両親のもとを訪ねていた。写真のキャプションは次のように始まる。“Mr. and Mrs. Harry J. Iwagaki, from the Heart Mountain Center, are mighty proud of their two soldier son [sic], both of whom are Sergeants and six footers.”[34]陸軍の制服姿、キャプションが強調するように “six footers” と体も大きく、また写真の構図上も最前面を占めているKennethの男性性が際立つ一方、両親はKennethと並んで座っているとはいえ、心持ち、彼の背後に遠慮がちに、微笑みながら座っている。

また同じくHikaru Iwasakiによって撮られた写真では二世のMrs. John M. Sakaiが友人に、夫がイタリアの戦線で負傷した際に授与され、彼女のもとに送ってきたパープル・ハート勲章を見せている場面が捉えられる。キャプションはMrs. Sakaiの言葉を引用する。“My husband gave me the Purple Heart, added Mrs. Sakai, because he knew in my small way I was fighting beside him and that we are both fighting for the same cause…” [35]愛情で結ばれ、銃後で戦地の夫を支える、アメリカに忠実な妻のイメージが強調される。Mrs. Sakaiを写した別の写真のキャプションでは、収容所を出所した彼女だけでなく、いまだヒラ・リバー収容所にいる彼女の義理の母でさえ戦場で戦う夫を誇りに思うと強調し、その言葉の引用のあと、“She is a typical American wife who is patiently waiting for her husband’s return.”[36]と締めくくることで、「典型的な」愛国心をもったアメリカ人が夫の帰りを我慢強く待つ様子が強調される。

こうした写真にみられる親米派のナショナリズムのイメージに加え、陸軍省と戦時転住局はJACLの協力も得て、華々しく戦う二世兵士を称え、サ

ポートすることの大切さを強調する行事を各収容所内で展開した。例えば戦時転住局とJACLはハワイ生まれの帰米で陸軍上等兵のHiga Taroが各収容所を回る計画をした。日本語が流暢なHigaが自身の体験を語る講演会を開くことで、特に一世の聴衆に対し二世兵士が米軍の中でどのような活躍をしているのかを伝えようとした。このツアーの目的をJACLは日系コミュニティの戦時努力への協力を鼓舞することと捉え、二世兵士の愛国心を支えることで日系人間の団結を深めようとした[37]。このように、写真、収容所内の行事など様々な媒体を通して、アメリカに120％忠誠な日系アメリカ人像が創りあげられ、推奨されていった。

こうした親米派に対し、少数ではあるが日本への忠誠を謳い、その立場を他の日系人にも押し付けんばかりの示威行為にでた人々もいた。「不忠誠派」が集められたトューリ・レーク収容所では、親日派が「報国青年団」等の団体をつくり、丸刈り、鉢巻といった服装で、朝の体操や軍事教練に似たようなことを行った。1944年後半には真に日本に対して忠誠な自分たちとそれ以外の日系人を収容所内で再隔離するよう、戦時転住局に要請する運動も起こしている。親米派のイメージの中で二世兵士の男性性が強調されたことに呼応するかのように、親日派の間では日本男児の男性性が色濃く前面に押し出されている[38]。

このように収容所内では親米派、親日派とあいまいさが許されず、多くの人が暴力的な結末を恐れて口を閉じる環境の中、文学という創作活動の中では、特に忠誠登録などの複雑な問題に関して、日常では発言することが難しい気持ち、感情などを表現することができた。収容所内で発表された文学を分析する際に、前述のJames Scottが提示した「隠された記録」（Hidden Transcripts）という分析的フレームワークが有効になる。Scottは、抑圧された人々が支配者の直接的な監視が及ばない「舞台裏」（off-stage）で展開する言説を「隠された記録」とよび、その中に抵抗を見出した[39]。収容所内における日本語の文学表現は日本語で書かれているがゆえに収容所管理者側の包括的な監視を避けることが出来た。また、文学は管理者から

も日系人からも「政治」や「イデオロギー」の発言というよりは、「文化的」表現であるため「無害」だという見方が強く、それゆえに忠誠問題をめぐって、二項対立的な立場を超えたより複雑な批判的見地を反映することのできる「隠された記録」と成り得たのであろう。

以下、頁数の制約もあるので、帰米二世の野澤穣二が、忠誠問題をテーマにトューリ・レーク収容所で執筆し『鉄柵』に発表した二つの短編小説、「志願兵の父」と「ながされる者」に絞って、分析していく。「不忠誠」者を隔離収容したトューリ・レーク収容所で書かれ、発表されたにもかかわらず、この二作品は「忠誠」者の現実や心の葛藤にも踏み込んで描写しており、政治的には合衆国か日本かで分断されがちな忠誠問題に、国家間の線を超えた対話を可能にする視点を提供している。

野澤はロサンジェルスで生まれた後、日本に返され東京の神田で育った。1938年にロサンジェルスに戻り、高校を卒業した。ロサンジェルスの日系新聞、『羅府新報』で働いていた父の影響もあって、文学を好み、河合一夫、山城正雄といった他の帰米の文芸人と交友関係を深めていった。戦争勃発とともに最初はコロラド州のグラナダ収容所に入れられたが、忠誠登録後、「不忠誠」としてトューリ・レークに送られた。トューリ・レークでは『鉄柵』の中心的メンバーとして活躍する。トューリ・レーク収容所内に移ってきた当初の雰囲気について野澤は1965年に発表した随筆の中で次のように述べている。

> 翌朝メスホール（食堂）に行くと部落支配人から、「真の日本男子を迎へることは喜ばしい」と、クスグッたいやうな祝辞を述べられ、拍手をもって迎へられた。
>
> 山城君も私も不忠誠組になって来たとは云へ、それぞれの理由があってのことだ。何も日本男子を誇りたくて、来たわけではない。私は召集される心配はなかったが、若し採られて太平洋戦線にでも送られては堪らないといふ気持から、不忠誠組といふ安全地帯を選んだつ

もりだった[40]。

問題や衝突を避けるため、山城とともに野澤は荷造りをして、親日派色の強いブロックから引っ越す。『鉄柵』の文学活動に打ち込む中で取り組んだ一つのテーマはいわゆる「忠誠組」とよばれている人々の複雑な心理だった。

『鉄柵』七号に発表された小説、「志願兵の父」の中で野澤は三人の息子をアメリカ軍に送った「忠誠心篤い」一世の父親の葛藤を描く。物語のあらすじは次のようなものである。三人の息子を持つ一世の佐伯氏は敬虔なクリスチャンであり、収容所の食堂の料理長を勤めるなど、収容所のブロック内での信用も厚い。忠誠問題を巡って、三人の息子は軍に志願することを希望する。アメリカ市民としての義務を果たすことも大切と考える佐伯氏は息子達の意思を尊重する。しかし息子達が入隊して収容所を去った後、収容所の住民達は佐伯夫妻に対して距離をおき、疑念を露わにするようになる。親日派の人々は佐伯氏を息子たちの志願を抑えることもできない、家長としての役割をも果たせない男として、佐伯氏の男性性を攻撃する。中には佐伯氏を収容所当局のスパイを意味する「イヌ」と呼ぶ者さえ現れた。日に日に収容所内の環境は居づらいものになっていき、佐伯夫妻は中西部のミシガン州にある白人家庭に住み込みの料理人、家政婦として転住することを決める。

再定住した先の白人の雇い主はある意味リベラルで、三人の息子達を入隊させている佐伯夫妻を「歓迎」した。ミシガンでは一見順調な生活が始まるが、佐伯夫妻は相次いで二人の上の息子を亡くす。このころから佐伯氏の忠誠問題をめぐるアメリカへの態度が大きく変わっていく。三番目の息子の死は大きな衝撃と損失を与え、「忠誠心篤い」一世としてアメリカ社会にとけこもうとしていたそれまでの態度を、佐伯氏はとらなくなった。クビにされたのか、自分から出て行ったのかは明らかではないが、佐伯夫妻は白人家庭から姿を消す。

この作品の中で、野澤は合衆国への忠誠、そして軍隊への志願が日系の一家族に与えた影響を描き、特に一世で志願兵の父でもある佐伯氏の内面の葛藤に焦点をあてる。親日派の影響が強く、多くの人々が争い・誤解を避けて口を閉ざしていたトューリ・レーク収容所内で書かれ、発表されたことを考えると、親日派が「イヌ」と侮蔑した「親米派」ととられる主人公の複雑な内面を描写したこの作品には「政治的」言質には浮かび上がってこない、忠誠問題を巡る複雑な葛藤が反映されている。特に二人の息子を失った後、自分のそれまでの信念に疑念を抱き始めた佐伯氏の葛藤に、「忠誠」「不忠誠」というレッテルだけでは到底説明しきれない複雑な心境が描写される。

二人の息子を失い、佐伯氏は反問する。

> 子供達の幸福のために－。結局それも自分の良心を誤魔化す言質にすぎなかったのではないか。又、子供達は本当にアメリカで幸福だったらうか。自分の教育が果して親として真実なものであったらうか。そんな限りない反省が、磯辺の波のやうに引いては返し引いては返し、疲れ切ってゐる佐伯の胸に郷愁の延長となって押し寄せた[41]。

戦時転住局の写真に見られるような、迷いなく銃後で二世兵士を支える家族のイメージとは対照的に、佐伯氏は自分の立場に悩み、息子たちの置かれた境遇への憐憫を募らせていく。三番目の息子、三郎の戦地からの手紙はそんな佐伯氏の胸をさらに打った。「星空を眺めながら露営するときなど、虫の音を聞くとキャンプが懐かしい、と書いてあることもあった。佐伯はそんなところを読むと、故郷でもないキャンプを慕ふ三郎が不憫でならなかった[42]。」

三郎の戦死後、佐伯氏の憐憫の情は明らかな怒りへと変化する。ミシガンで現地の新聞記者のインタビューをうけ、新聞記事に引用された佐伯氏の言葉は次のようなものだった。「三人の子供達もアメリカの為に戦死し

たと思へば、今頃は天上で満足に思ってゐるでせう。私もそれを思ふと悲しみよりか、光栄とする喜びの方が大きい[43]。」しかし、この記事が載った新聞を手にした佐伯氏は雇用主の目の前であるのにも関わらず、新聞をグチャグチャに丸め、踏みつける。「忠誠」を証明しなければならない白人の雇用主の目前でのこの佐伯氏の行動は、戦時転住局が推進した「二世兵士の活躍を銃後で静かに見守る一世と二世女性」というイメージとは対照的に、日系アメリカ人の置かれた状況に対する怒りの表現であるとともに、ささやかな日常の「抗議」を象徴するかのようだ。

野澤が『鉄柵』に発表したもう一つの作品、「ながされる者」は忠誠登録で「不忠誠」となった帰米の弟が、二世兵士の兄の変化を描くという構成である。戦前に徴兵された兄は、徴兵される前は大学へ行くことをめざし、スクールボーイとして白人家庭で働きながら、勉学に励んでいた。そんな真面目な兄を弟は尊敬していたが、徴兵されたとたん、兄の態度は享楽的なものに変わっていく。弟が収容所に入れられた後、兄は時々休暇を利用して弟を訪ねてくるが、兄の訪問の理由はむしろガールフレンドである二世のヘレンに会うことだった。兄はヘレンとの愛を純粋に信じているが、弟はヘレンが「軍人」としての兄の地位に魅かれているだけなのではと危惧する。

弟の予想通りヘレンとの関係がうまくいかなくなったこともあって、兄はしばらく弟を訪ねてこない。後になって弟はその本当の理由を知る。ある夏の暑い日、兄の所属する部隊は行程の長い行進を命じられる。イライラしていた兄は武器や武装を完全に携えないまま行進に参加してしまう。行進の途中に上官にそのことを見咎められ、上官の直接の監視下ライフル二丁を背負わされ、罵声をあびせられながら行進するはめになる。躓いたところを執拗に咎められた兄は癇癪をおこし、武器を投げ出してしまう。他の上官が走り寄ってくる様に、事の重大性に気付いた兄は、その場で上半身裸になり「殺せ、殺せ」と叫ぶ。日本語のわからない白人の上官はどうしたらいいか途方にくれていたが、他の日系兵士達は「喜んで拍手喝采

だった」という。

その後兄は精神鑑定のために病院におくられる。精神病のふりをして兵役を免れようとも考えるが、病院に閉じ込められることをおそれ、降格と罰金処分で隊に戻る。今は「不忠誠者」としてトューリ・レークに移された弟を訪ねた兄は弟に弱々しく訊ねる。「君は俺みたいな兄を持つて情けないと思ふか。」弟は兄の気持ちがよくわかると伝え、「憎々しいまでに叩きのめされた兄」をやさしくうけとめていこうと思う。

この作品の中で野澤は親米派からは「忠誠心篤い男性の見本」として美化されている二世兵士の現実や心の葛藤を「不忠性」のレッテルをはられた弟に語らせている。美化された日系兵士のイメージとは対照的な兄と「二世兵士」のイメージに憧れるヘレンの関係はうまくいかない。癇癪をおこし事態の深刻さに気付いた兄が駆け寄ってくる白人の上官たちに向かって「殺せ、殺せ」と絶叫する場面では、それを「喜んで」ながめる他の隊員たちの姿に、人種隔離編成された日系人部隊の日系人隊員と白人の上官との関係性を垣間見ることができる。そして最後に、兄弟は「忠誠」「不忠誠」というレッテルをこえて結びつきを強める。忠誠登録がその後長くにわたって日系アメリカのコミュニティを断裂したことを考えると、「忠誠」「不忠誠」のレッテルを超えてそれぞれの心情や立場を描き、理解し、レッテルを超えた結びつきの可能性を小説の中で示唆していることに、野澤の作品の先見性を感じさせられる。

結び

第二次世界大戦下、「日本的な」ものを排斥していくことに対してかつてない圧力を受けた日系コミュニティであったが、各地の収容所内で展開した文化表現は、戦前からの伝統を踏襲する日米のバイカルチャルな表現が色濃く表れた。戦時転住局による「アメリカ化」や「英語だけの環境づくり」といった体系化、制度化された圧力にもかかわらず、発信されたバイ

カルチャルな表現は日系アメリカ人の「文化的主体性」の力強い主張以外の何物でもないであろう。

こうしたバイカルチャルな表現の一部として開花した収容所内での日本語文学活動は、対収容所管理当局だけでなく、日系コミュニティ内でも激しく見解が対立する忠誠問題などのテーマをより深く吟味することのできる文化的スペースを提供した。頁数の関係上本稿では野澤の二作品しか扱うことができなかったが、日本語文学は作者が強制収容所という閉鎖された環境の中にもかかわらず、忠誠問題に関し、感情や事態の複雑性を加味しながら思考を掘り下げていくことを可能にした。戦時転住局の監視、親米派、親日派などのコミュニティの中での対立など、感じていること、思っていることを率直に表現することが難しい政治状況の中で、野澤などの日本語文学の作家たちは忠誠問題に関して批判的見解を表現し、複雑かつ微妙な論議を文学上で展開することができたのである。このように複雑さを帯びた繊細な議論は出版された雑誌を通して、広くコミュニティの中で共有された。このような文化的表現とその共有は、日系コミュニティが戦前から培ってきたバイカルチャルな文化活動の土台があったからこそ可能になったものであり、戦時下における極度のアメリカ化の圧力のもと日系アメリカ文化の主体性を主張し続ける抵抗の一翼として位置付けることができるであろう。

注

1　Monica Sone, *Nisei Daughter* (Seattle and London: University of Washington Press, 1979).

2　Ibid, 153.

3　Ibid, 153.

4　Ibid, 154.

5　Ibid, 156.

6　展覧会は両親が強制収容を体験した三世のDelphine Hirasunaが2005年に出版した*The Art of Gaman: Arts and Crafts from the Japanese American Internment Camps*

1942-1946 (Berkeley: Ten Speed Press, 2005)をもとに準備、計画した。この展覧会は日本でもNHKの番組、クローズアップ現代「Gamanの芸術：日系アメリカ人尊厳の世界」を通して紹介されている。

7　各収容所で出版された日本語文学雑誌の復刻版は篠田左多江，山本岩夫編『日系アメリカ文学雑誌集成』全22巻（東京：不二出版，1998）に収められている。日本語による日系アメリカ文学の歴史に関する先行研究の代表的なものには、篠田左多江，山本岩夫編著『日系アメリカ文学雑誌研究―日本語雑誌を中心に』（東京：不二出版，1998）；水野真理子『日系アメリカ人の文学活動の歴史的変遷：1880年代から1980年代にかけて』（東京：風間書房，2013）などがある。

8　大半の二世と異なり、アメリカで生まれ市民権は持つものの、家庭や学業などの事情により日本で幼少期を過ごした後、アメリカに戻ってきた二世のことを指す。

9　Arthur Hansen, “Cultural Politics in the Gila River Relocation Center 1942-1943,” *Arizona and the West* 27:4 (Winter 1985): 327-62 and Gary Okihiro, “Japanese Resistance in America’s Concentration Camps: A Re-evaluation,” *Amerasia Journal* 2:1 (Fall 1973): 20-34.

10　James Scott, *Domination and the Arts of Resistance: Hidden Transcripts* (New Haven: Yale University Press, 1990), hereafter cited as *Domination and the Arts of Resistance*.

11　戦時転住局が強制収容所を「モデル・コミュニティー」として捉え、アメリカ化政策を推進していく過程は、島田法子『日系アメリカ人の太平洋戦争』（東京：リーベル出版，1995），58-63 を参照。

12　D.A. Conlin, “Adult Education: Final Reports,” Microfilm Reel 311, Japanese [American] Evacuation and Resettlement Study Records (JERS), BANC MSS 67/24c, Bancroft Library, University of California at Berkeley, hereafter cited as JERS.

13　U.S. Department of Interior, War Relocation Authority, *Administrative Manuals*, 30:5, Community Activities, dated 15 June 1944, Washington D.C.: Government Printing Office.

14　1942年9月9日付けのEmbreeの9頁に及ぶ報告書、“Notes on Poston Project”は戦時転住局局長Dillon Miyerの以下のような前書きとともに、戦時転住局職員の間で広く参考にされていた：“The successful administration of the WRA program, … will be depended on a great extent upon an understanding of the cultural background of the Japanese people and their American children and grandchildren. John F. Embree, who recently has assumed responsibility for documentation of the WRA program, in the office

of Reports, has conducted studies in both Japan and Hawaii, and is recognized by his colleagues as being well qualified to report on Japanese race and culture. The accompanying notes on Dealing with Japanese Americans are commended to the attention of all WRA staff members." John F. Embree, "Notes on the Poston Project," September 9, 1942, Reel 187, JERS.

15　Ibid.

16　Marvin Opler, "A 'Sumo' Tournament at Tule Lake Center," *American Anthropologist* 47 (1945): 134-139, and Marvin Opler and F. Obayashi, "Senryu Poetry as Folk and Community Expression," *Journal of American Folklore* 58:227 (January-March 1945): 1-11.

17　D.A. Conlin, "Adult Education: Final Reports," Microfilm Reel 311, JERS.

18　"Most important thing in camp is to Boost Moral. The Isseis are the most frustrated." Interview with "N," the head of Adult English who is leaving, 21 April 1943, Microfilm Reel, 257, JERS.

19　"[These classes made a significant contribution] to the morale and well being of the community." Ibid.

20　Duncan Mills, Project Director, and C. W. Powell, Assistant Project Director, Poston writes: "Activities like these tend to contribute, and to preserve, the qualities of serenity, of reflectiveness and sensitivity without which community life would be less rich. Such groups reflect credit not only upon their faithful members, but upon the community in which their art is practiced."『ポストン文芸』（1945年新年号）『日系アメリカ文学雑誌集成』10巻，篠田左多江，山本岩夫編，2.

21　篠田左多江「青年活動から生まれた文芸誌『怒濤』－その3/5」2011年3月25日 http://www.discovernikkei.org/en/journal/2011/3/25/dotou/（2014年2月27日アクセス）.

22　野沢穣二「鉄柵の思い出」『南加文芸選集』藤田晃編（東京：れんが書房，1981），201.

23　『鉄柵』3号（1944年7月号）『日系アメリカ文学雑誌集成』5巻，篠田左多江，山本岩夫編，23.

24　「編集後記」『ポストン文芸』（1945年2月号）『日系アメリカ文学雑誌集成』10巻，篠田左多江，山本岩夫編，88.

25　有田育「活け花展」『ポストン文芸』（1944年12月号）『日系アメリカ文学雑誌集成』9巻，篠田左多江，山本岩夫編，54.

26　松原信雄「静かな生活」『ポストン文芸』（1944年12月号）『日系アメリカ文学雑誌集成』9巻，篠田左多江，山本岩夫編，83-84.

27　山城正雄「キャンプ雑感」『鉄柵』（創刊号）『日系アメリカ文学雑誌集成』5巻，篠田左多江，山本岩夫編，2.

28　Monica Sone, *Nisei Daughter*, 181.

29　例えばポストン収容所のCommunity Analyst、Edward H. Spicerは収容所内の学校の教員たちに行った講演のなかで、「強制退去はそれまで進んでいた同化を止めてしまった。ポストンは文化的に孤立しており、人種的な違いが存続することが許されている。」と述べる。E. H. Spicer, “Problems of Racial Minorities in a Democracy,” Reel 241, JERS.

30　加川文一「下駄」『鉄柵』8号（1945年4月号）『日系アメリカ文学雑誌集成』6巻，篠田左多江，山本岩夫編，26.

31　Ibid.

32　加川文一「創刊の辞」『鉄柵』第一号（1944年3月号）『日系アメリカ文学雑誌集成』5巻，篠田左多江，山本岩夫編，1.

33　Dorothy Thomas and Richard Nishimoto, *The Spoilage* (Berkeley, Los Angeles, and London: University of California Press, 1946), 56-57; Roger Daniels, *Concentration Camps USA: Japanese Americans and World War II* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1972), 112-13.

34　War Relocation Authority Photographs of Japanese-American Evacuation and Resettlement, BANC PIC 1967.014, Box 16, Group 10, The Bancroft Library, University of California, Berkeley, <http://www.oac.cdlib.org/dynaweb/ead/calher/jvac>.

35　Ibid, Box 13, Group 31.

36　Ibid, Vol 50, Section F, WRA no 1-524 <http://www.oac.cdlib.org/ark:/13030/ft029002bn/?brand=oac4>.

37　Tarō Higa Papers, Japanese American Research Project Collection (Collection 2010), Department of Special Collections, University Research Library, University of California, Los Angeles, Box 153, Folder 8.

38　「報告青年団」の台頭など隔離収容所に指定されてからのトューリ・レーク収容所の先行研究に関してはDonald Collins, *Native American Aliens: Disloyalty and the Renunciation of Citizenship by Japanese Americans during World War II* (Westport, Connecticut.: Greenwood Press, 1985); Gary Okihiro, “Tule Lake under Martial Law: A Study in Japanese Resistance,” *The Journal of Ethnic Studies* 5:3 (Fall 1977): 71-85; 村川

庸子，粂井輝子『日米戦時交換船・戦後送還船「帰国」者に関する基礎的研究―日系アメリカ人の歴史の視点から―（トヨタ財団助成研究報告書）』（トヨタ財団，1992）などを参照。

39　James Scott, *Domination and the Arts of Resistance*, 4-5.

40　野沢穣二「鉄柵の思い出：騒乱の館府ツール・レーキ」『南加文芸選集』藤田晃編（東京：れんが書房1981年），191.

41　野澤穣二「志願兵の父」『鉄柵』7号，『日系アメリカ文学雑誌集成』6巻，篠田左多江，山本岩夫編，50.

42　Ibid, 51.

43　Ibid, 53.